

# みんなの随想

「あなたの趣味は？」。こ

の日常的な質問に胸を張って答えられるようになったのはごく最近のことである。「チヨウの採集です」と答えていた頃は「冬彦さん(TVドラマの主人公)みたい」「コレクターって映画見た?」。最後には「佃煮にでもさんの?」と、返答も億劫になるやりの連続だった。

しかし、最近では「チヨウの研究です」とちよっと表現を変えてやると、相手が何やら学術的な匂いを勝手にかき

渡辺 浩

石川町・ワタコギター  
ミュージックスクール代表



## 「昆虫少年」

つけて、それ以上踏み込めない領域を形成してしまうという法則を発見したのである。何とも便利な言葉なのでつい多用してしまっただが、その効果はテキメンである。

次に出てくる質問が「何が面白いの?」である。最も手強

い質問である。そんな時、私は一気に「チヨウの魅力について相手の存在すら忘れ熱く語る。すると大抵の場合その反応は「ふうん」で完結する。どうやら早く話題を変えたいなるらしい。私の勝利である。さらに手強いのが子どもたちからの質問である。どうし

て生きているチヨウを殺すの」。この究極の質問には大人の威厳をちらつかせながらこ

う答える。「皆さんは牛や豚や鳥さんに、自分たちが生きるために代わりに死んでくれて

ありがとうございます」といって、昆虫の命のかわりに知識をもらっているのです。昆虫のことを知らない人がどうやって自然保護を語れるでしょう。だから皆さんにはもっと昆虫採集をしてほしいのです。いや、何と子ども向けの回答になっていないのか。

しかし昨年夏、親と子のための夏休み昆虫教室を開催した時のこと、感動的な場面に遭遇したのである。参加した親も子どもみんな虫に目を輝かせ、親は子に威厳を示すか

のように子ども時代の知識を最大限に引っ張り出し、子はそんな親を羨望のまなざしで見つめていた。昆虫に夢中になれる最後の世代と自負して

いた私にとって「なんだ、まだまだ子どもも親も虫に心躍らせる人たちがいるんだあ、日本の将来もまだ捨てたもんじゃあない」。打ち上げのビールのおかげだったこと。野山を駆け回り、虫たちに触れ、自然に触れ、そんな子どもたちが成長し、どんな日本を、どんな

地球を創ってくれるのか、想像しただけでますます夜のビールが旨くなりそうだ。私たち大人は、自分たちが招いた環境破壊で、それを誤魔化すかのように、取っ

付けたような自然保護の法律だけを無理矢理子どもたちに押し付けて、彼らから大切な体験をするチャンスを奪ってしまっ

てはいないか。知らない世界の問題を解決しろと言われても、それは無理な相談なのだから。「あなたの趣味は?」と聞かれたら、迷わず「チヨウの採集です」と答えられる大人でいようと思つ。さて、明日は捕虫網を片手にどこへ行くかなあ。